地域とともに歩む

1 高校連携で始まる人材循環

新　連　載

地元を想う高校生が佐渡の海岸で“音楽フェス”を開催

―佐渡中等教育学校（新潟県）―

浦崎太郎 大正大学地域構想研究所 教授

意欲をもって主体的に学び、課題を発見・解決する能力を高め、将来は地元に帰って活躍しようと志す生徒が続出する高校が全国各地に姿を現しつつある。今月から始まるこの連載企画では、どんな連携が高校生を育んでいくのか、活路を拓いた人物の歩みに焦点を当てつつ、事例を紹介する。

写真提供●新潟県立佐渡中等教育学校

Taro Urasaki

1965年岐阜県出身。岐阜県内で高校教師として学校と地域の連携について実践的に研究。2017年4月より現職。地域創生学部で実習企画や学生指導を担いつつ、高校と地域が連携して人材育成と地元回帰を推進する仕組みの普及に尽力。文部科学省中央教育審議会学校地域協働部会専門委員を務めた。

1 4月22日、金井新保の八幡宮で行なわれた「あの佐渡PROJECT」の様子。2 地域の大人と生徒をつなぐ「佐渡のしゃべり場」の仲間たち。(2015年撮影)

佐渡の魅力を海から伝えるイベントを開催

「海の日」を含めた3連休の初日、7月15日に佐渡市住吉海岸で『Sフェス』というイベントが開催された。

『Sフェス』とは、Sea、Sound、Shoku（食）、Students、Sadoなど、たくさんの“S”を詰め込んだフェスティバルのこと。若者が楽しめる音楽イベントを通じて、佐渡の魅力を海から伝えていきたいと願う、中高一貫校である新潟県立佐渡中等教育学校5年生（一般でいう高校2年）の有志5名が発案し、彼らが中心となって創りあげたイベントだ。

生徒が発案・制作した「Sフェス」のロゴ。

当日は天候にも恵まれ、「Sフェスのために島外から来た！」という人も含めて103名が、DJライブやビーチスポーツ、バーベキューなど、佐渡の海を満喫した。来場者からは「すごく楽しかった」「来年もやってほしい」という声が数多く寄せられ、成功を収めた。

地元を想う高校生が地域イベントを創り出す例は、これまで全国的にもほとんどない。もちろん佐渡では、画期的ともいうべき出来事だ。

実はこのイベントの成功は、2人の人物の支えがあったからこそ、実現したものだった。1人は、佐渡市教育委員会学校教育課指導主事（現・佐渡市立真野小学校教頭）平野徹さん。もう1人は、新潟県立佐渡中等教育学校教諭の宮崎芳史さんだ。

かねてより地域と連携したキャリア教育に関心を寄せていた2人は、2014（平成26）～2015年にかけて、東北芸術工科大学（山形県）が主催する「SCHシンポジウム」(*)や、新潟市を拠点に活動する教育支援団体「みらいずworks」が主催する研修会で意見を交換していた。高校と地域が連携して、人づくりと地域づくりを一体的に展開する重要性について理解を深め、それぞれの立場で実現策を模索していた。

選挙権年齢が18歳に引き下げられ、社会参加に必要な知識、技能、価値観を習得させる「主権者教育」に対する社会の関心が高まっているが、地域と高校の連携は遅々として進んでいないのが現状だ。

平野さんが動き始めたのは、こうした気運が高まる前で、しかも、管轄外である県立学校との連携を提案するとなれば難航は必至だった。

「当時、高校との連携を市教育委員の施策に盛り込もうと、地域関係者をつないで回っていました」と平野さんは言う。

「しかし、なかなか理解が得られず、何度も壁に直面して、それでも粘り強く働きかけを続けた結果、2015年4月に高校と地域をつなぐ組織『佐渡キャリア教育ネットワーク』（SCN）の設立に漕ぎつけることができました。また、同年度内には、高校との連携を佐渡市のキャリア教育のグランドデザインに位置づけることにも成功しました」（平野さん）

SCNには高校教員、市教委職員、市議会議員、佐渡で活動するさまざまな地域団体、地域住民有志、地域おこし協力隊等が集まっていた。そして「まずは小さな一歩から」（平野さん）と縁を丁寧に紡いだ。

その結果、同年夏、毎年島外からもたくさん来場者が訪れる野外フェスティバル「アース・セレブレーション」の主催者が企画した、高校生ボランティアと来場者の交流イベント「佐渡のしゃべり場」のサポートにSCNが加わることになった。

「それまで私たちが当たり前と思っていたものが島外の人たちから評価され、高校生を地域とつなぐ価値を実感しました。とはいえ、こうした機会をより多くの高校生に提供する有効策は浮かばず、苦悩が続きました」（平野さん）

地域とのつながりを活かしたキャリア教育

大きな転機となったのは2016年4月、宮崎芳史さんの佐渡中等教育学校への赴任だった。みらいずworksがSCNの立ち上げ支援に加わっていた縁で、宮崎さんは着任早々SCNに合流。一方、学校では4年生（同高校1年）のキャリア教育を任された。宮崎さんが、地域と連携したプログラムの開発を直ちに始めたのは当然だった。

宮崎さんは、進学校として生徒全員に提供すべき職業や学部学科に関する一般的な指導事項を踏まえた上で、地域とのつながりを最大限に活かしたキャリア教育を構想する。

「具体的には、総合的な学習の時間において、事前学習として『働くとは何か』『豊かさとは何か』などを意識させ、昨年7月

*SCHシンポジウム＝高校と地域の連携を志向する高校・自治体・民間団体が一堂に会する2日間のプログラム。事例発表や技能研修を交えつつ、連携を具体化するためのプロセスを描く。SCHは「Super Community High school」の略。

佐渡の住吉海岸に集まった生徒たち。各々の手にはイベントで使う“水風船”が握られている。

3 DJ(Namy)とサックス(DAISUKE)をゲストに迎え“音楽フェス”を実現。4 島内外から多くの若者が参加して盛り上がった。

上旬にSCNで活動を共にする地域おこし協力隊員から『佐渡で働こうと思った理由』『佐渡の魅力と可能性』『仕事を自分で創り出す』をテーマに講演をしてもらいました。そして、事後学習では『1人1プロジェクト』と称して『自分が佐渡のためにできる仕事』を全員に考えさせたんです」（宮崎さん）

ここまでは授業の一環だが、その上で、意欲の高い生徒に対しては「自主校外体験」として、自分が考え出したプランを夏休み以降に可能な範囲で実行させる。そしてその先、もっと地域で活動したい生徒はSCNに委ねることにした。

構想の実現に向けて宮崎さんらが進めた入念な準備が奏功し、多くの生徒は講演に感銘を受けた。

「生徒たちは地域と関わっていこうという意欲がグーンと高まり、事後学習にも積極的に取り組んでいきました。『Sフェス』の原型が生まれたのもこの頃でした」と宮崎さんは振り返る。

そして、筆者が行った講演会によってSCNは自信を深めていき、アース・セレブレーションだけで実施していた「佐渡のしゃべり場」を発展させ、SCNが中高生の地域活動を担う方向性が徐々に定まっていった。こうした流れは『Sフェス』に対する宮崎さんの指導にも好影響を及ぼしていた。

「生徒の計画はスケールが大きすぎて、到底、学校教育の中では実施できないものでした。そのため、教員としては『来夏の実現を念頭に、今夏は準備活動に充てよう』という指導に留めることにしたんです」（宮崎さん）

『Sフェス』のイメージは、夏休み前からSCNのメンバーと共有していたものの、成り行きによっては空手形に終わる懸念も残っていた。だが、徐々にSCNメンバーたちの変化を実感し、宮崎さんは今後の発展を確信。学校が行う8月22日の自主活動に際して、海岸清掃や地域との関係づくりの意義を生徒に迷いなく語りかけることができた。その結果、宮崎さんの言葉が生徒の心に強く響き、来夏にむけた想いが高揚していったという。

1 ランチミーティング時に音響担当者も加わって打合せをするプロジェクトチームの面々。2 ボランティアフェスティバルに参加して、「Sフェス」の告知と募金活動をする生徒たち。3 地域の企業が集まる勉強会にも参加して関係を構築。4 今年3月19日、PROJECT発表会での「Sフェス」チームによるプレゼンテーションの様子。

生徒が主役となって運営する場づくりを構想

学校での指導を通して、意欲を高めた4年生のうち相当数は「佐渡のしゃべり場」にも参加し始め、夏は「未来について考えてみよう」、秋は「佐渡でセカイとつながってみない？」、冬は「働くってどういうこと？」を題材として、佐渡内外の人たちと意見を交わした。

その延長線上として、SCNは「佐渡を豊かにする中高生のPROJECT発表会」を用意した。これは、4年生のゴールとして、「私の志」を小論文にまとめさせる活動や、各自が夏に考えた「1人1プロジェクト」を軸に地域おこしPROJECTを発表する活動を考えていた宮崎さんが、生徒を主役に据えて運営する場づくりを構想していたSCNに提案したものである。

小論文への発展課題として、「発表会への参加」を加えて希望者を募ったところ、『Sフェス』チームを含めて4組が応募。今年1～3月には週に数回、昼休みと放課後にミーティングや研修を重ねたほか、2月27日のプレ審査では、ビジネスデザイナーの増山和秀さんから「ビジョンとターゲットの明確化」「ニーズの妥当性を検証する方法」「伝わりやすいプレゼン」「協力者の探し方」等の起業ノウハウを学び、自分たちの企画を掘り下げていった。そして3月19日の発表会では、どのチームも実に堂々としたプレゼンを披露し、「実現可能性」や「地域貢献性」等に基づいて、副市長や地元企業代表らの審査や助言を受けた。

ここを過ぎれば、あとは実施に向かって一直線。今年5年生に進級した『Sフェス』チームも特に6月以後、出演者との調整、企業への協賛依頼、ロゴの制作、SNSによる発信など、準備に邁進した。

「発表会の後も、経験の浅い生徒たちは何度も試練に直面しました。どのPROJECTも紆余曲折を繰り返していましたが、地元の方々のアドバイスや応援、叱咤激励のもと、SCNの面々がメンターとして支えました」（宮崎さん）

このようなプロセスを重ねて『Sフェス』は、本番を迎えたのだった。

イベント成功は数多くの関係者が快く協力したこと

この事業が成功できた最大の要因として、地域でも、学校の中でも、そして両者の間でも、十分な理解が得られ、数多くの関係者が快く協力に応じてきた点を挙げておかなくてはならない。その上で一連の経緯を俯瞰すると、さまざまなポイントが浮かび上がってくる。高校生を地域の担い手として育成する事業を学校だけで成しえないのは明らかであり、全体観をもち、行政を含めた地域的な仕組みを粘り強く構築した平野さんの貢献があったからこそ、イベントが成功したと言える。

一方、それは地域の力だけで成しえるものでもない。事業の成否を左右する分岐点は昨年7月にあったが、宮崎さんはその前後、地元の関係者と意思疎通を十分に図りつつ、生徒と継続的に関われる教師の立場や、生徒の意識が変容するプロセスを高い精度でデザインできる職能を最大限に活かし、授業等の構想や運営を成し遂げた。

さらには、社会教育への引き継ぎを見据えつつ、学校教育で担える限度までリスクを負い、機を逸することなく布石を打った。そうした宮崎さん、平野さんたちの覚悟や努力なくして、『Sフェス』の成功はなかったことだろう。

佐渡中等教育学校では、来年に向けての準備がすでに始まっている。

今回のポイント

- 市教育委員の担当者の尽力でSCNを組織でき、高校生を地域で育てることに成功。
- 校外にネットワークをもつ教師が、地元人材を活用する形で、生徒を地域につなげるキャリア教育の授業（学校教育）を企画・運営する。
- 生徒と毎日関わり、生徒を段階的に引き上げることのできる教師ならではの指導を完遂する。
- 夏休みの海岸清掃など、地元（社会教育）への引き継ぎを見据えつつ、学校教育で担えるギリギリまでリスクを負って、生徒に活動の場を提供する。

COLUMN 「Sフェス」を通じて高校生はどう変わったか

高校生の輝く場が佐渡に誕生

日頃から「大人と子どもが佐渡を一緒に盛り上げていける場はできないものか」と感じていたので、「佐渡のために頑張っている高校生を支援しなければ、大人は何のためにいるのだ！」との思いから、活動に関わりはじめました。

最初の「やらされているのか」という予想はいい意味で裏切られ、生徒たちが伸び伸びとやりたいことをやっているなと感じました。「Sフェス」で生徒たちは、このイベントのためにホームページやtwitterを開設し、ロゴマークを制作。特にそのデザインが秀逸で、グッズやTシャツにも反映させ、自信を持ってロゴを押し出している。自ら作成した物への信頼が羨ましく、そしてまぶしく映りました。今回は「高校生の目立つ場が佐渡に生まれた」ことに価値があると思います。今後は大人たちも「何かしたい」という高校生の気持ちを汲み取って、積極的にそういう場をつくり、提供することができればいいと思います。

川上一貴さん　佐渡青年会議所・佐渡市職員

佐渡を想う高校生の姿に共感！

この企画に協力しようと思ったのは「今まで佐渡になかった」からです。特に「高校生が佐渡のために」ということが新しく感じられ、若い人のがんばりに共感をもてました。

「佐渡のしゃべり場」発表会のロビーで懸命に練習している姿を見て、心を打たれたと同時に、「若者が楽しめるイベントがない！」という発表にはショックでしたが、確かにそうだなと妙に納得した感じがありました。でも、彼らはそれをバネにし、「それなら、ないものは自分でつくってしまえ！」という姿勢には感動でしたね。

このPROJECTを通じて、たくさんの人との繋がりを持てました。それによって、佐渡の雰囲気が変わってきたと思います。なによりも「子どもたちがまちを明るくする」ということを実感できました。

佐渡での楽しみなイベントが新たに1つ増え、今後の彼らの成長にも期待しています。

安達明宏さん　農業（おけさ柿生産者）

地域と連携するきっかけづくり

「地域の大人と関わることにより、社会で通用する力を育成したい」と思う生徒を増やして地域に貢献してもらいたい、というのは大人の論理です。多くの場合、生徒の想いが動きだす目的・価値にはなりません。生徒自身が地域と関わる価値を感覚的に理解することが重要だと考えました。そこで、「佐渡を豊かにしようと活動している大人と関わってみたい！」「自分も佐渡のためにアクションを起こしてみたい！」、生徒が本音の部分でそう思えるような、しかもワクワク感のある出会いをつくって行く、そんな想いから「地域人と話そう」という授業をおこない、学校が地域と連携を始めるきっかけづくりを目的としました。「Sフェス」や「1人1プロジェクト」はその結晶の1つだと思っています。佐渡のために活動する生徒を温かく応援・寄付・協賛してくださった地域と地元企業など、関わる方々のおかげで実現できたPROJECTでした。

宮崎芳史さん　佐渡中等教育学校教諭